

乳の海

藤原新也



乳の

原新也

著者●藤原新也(ふじわら・しんや)

1944年に生まれる。東京芸術大学油絵科中退。

著書に『印度放浪』『西藏放浪』『逍遙游記』

『全東洋街道』『東京漂流』『メメント・モリ』

などがある。

本書は『東京漂流』以来、3年ぶりに書き下ろした作品である。

乳の海

定価 1,400円

昭和61年4月6日 第1刷
昭和61年4月11日 第2刷

著者 藤原新也
発行者 富田耕作

発行所 株式会社 情報センター出版局

東京都新宿区四谷2-1
四谷ビル 〒160
電話 東京(358)0231
振替 東京4-46236

落丁・乱丁本はお取替えいたします
© 1986 Shinya Fujiwara

萩原印刷所
0095-286041-3458

乳の海
目次

機械じかけの聖母——プロローグ 7

風の犬 25

青年とチワワ 57

朝のパルス・山犬の夜 99

イノセントランド行き・涙の連絡船 131

イエローボイス・エッセイ 149

○・三秒の沈黙 169

桃の栽培 189

トム坊やの自閉的な冒険 223

子宮サイズの馬之助 259

義眼の犬 287

消える蛇——エピローグ 317

解題 ペルソナ以後 329

装幀 龜海昌次

乳 の 海

機械じかけの聖母——プロローグ

そのキリストは、復活しない。

まるでペストにかかったかのように瘦せこけ、^す體え、蒼ざめている。

傷つき、体液を滴らせ、腐敗臭すら発散しているかに見える。

十字架にかけられたキリストを描いたその奇妙な複製画を、私は何年間か自分の部屋の壁にピンナップしていた。一七世紀ネーデル・ランド地方のグリュネワルトという画家の描いたものである。絵はいつ見ても異質だった。中世ヨーロッパの御用絵かきのだれもが、処刑されたキリストを、やがて復活するであろう不死身の超人として描いたにもかかわらず、彼のそれは異なっていた。彼はキリストを、金輪際復活しそうな完璧なる屍として描き切っている。

私とその画面に興味を持つのは、キリストが屍として描かれているということによってのみではない。ヨーロッパ中世のすべてがカソリシズムの權威で統制され、一色に塗り込められた風潮の中で、わりと、のうのうとジーザス・クライストを腐敗すら臭う屍として描き、しかも、多分その技量の故に教会関係者の目を欺き、彼らを喜ばせたであろう一人のふてぶてしい人間の意志をそこに見るからである。

この不埒なキリスト画を描いたグリュネワルトのことが、ときたま何かの折に、ふと脳裏に過ることがある。八四年の春のある日もそうだった。八十年代も半ばに近づいて、何か世の中が妙に明るい色一色に塗り潰されていくのを覚えながら、私はグリュネワルトの意志を思った。

その思いのまま、ドイツに行った。そして原画を見て帰ってきた。

ただグリユネワルトと対面してくるだけという一週間ばかりの小旅行だった。

さて、私はこの小旅行で、グリユネワルトの作品の他に、もうひとつ得体の知らない美術作品に遭遇したことをここに記しておかなくてはならない。作者の名は不詳である。

旅行の帰り道に時間が余ったのでロンドンに立ち寄ったのだが、その町の一角で、あのグリユネワルトのキリスト画とは異なる意味で、異質な美術品に偶然出会ったのである。

これから書き記す物語を、私はその小旅行で出会ったひとつの美術品の話から書き起こすべきであらうと思う。

ロンドンでは、ただ町を歩きまわった。市郊外のノミの市にも二度ほど出かけた。もし大英帝国時代の地球儀のようなものがあれば小さいものを一つ欲しいと思っていた。べつに地球儀や地図を集める趣味があるわけではないが、地図を見るのは好きである。地図があれば音楽も絵も小説も要らない。何時間でもそれを眺めて楽しむこともできる。見終えたと一編の旅行記を読んだ気分になる。地球儀を回せば終わりのない大河旅行記をいつまでも楽しむことができるだろう、という虫の良いことを考えている。

ノミの市では板や布に描いた稚拙な世界地図に何枚か出くわしたが、思いを遊ばせるほどの

ものではなかった。奇妙な美術品に出会ったのは、二度目に訪れた夕刻、そろそろホテルに帰ろうかと思いながら、市の外れのほうのある古びた店構えの骨董屋に入った折である。古いイギリスのものを中心とした絵や彫刻が乱雑に置かれている二〇坪ばかりのフロアを一通り見終えて、外に出ようとすると、出口の脇から地下に下る黒いらせん状階段が目に入った。覗き見ると地下には薄暗いタングステン電灯が灯っていて、古色食んだ幾つかの彫像や額付きの油絵を照らしていた。

妙に秘密めいた雰囲気を感じて、誘われるように階段を降りていった。地下室には微の臭いと、金属の腐食した臭いが充満していた。一階のフロアよりも天井が高く、タングステン電灯の明かりが十分には届かないくらい大きな騎馬のブロンズ像が一つ真ん中にそびえ立っている。そのまわりに様々な彫像が林立していた。

彫像やキャンバスを倒さないように、用心深く像や額の間の狭い通路を通り抜けながら、ひとつひとつ作品を見て歩いた。薄暗い中で埃を被っている分だけいかにも骨董の感じが出ているが、よく見ると粗大ゴミ一步手前のガラクタが多い。倒れたキャンバスを突き破って首を出した西洋甲冑があったり、またこれがどうして骨董なのか理解できかねるような、産業革命のころのものではないかと思われるような機械の部品があったりした。

いくつかの裸電球の下を通して、騎馬像の裏側にまわり込んだ時、ヤニ色の絵やくすんだ青

銅の彫像ばかりの骨董の中に、そこだけがほんのりと柔らかな色彩を放っている一角のあるのが目に留まった。近づいていくと、目が空洞になって永遠を見つめているような多分贋物だと思われるシュメールの石像の横に、一体の大きな彩色彫像が座っていた。

「聖母マリア像」である。

三〇ワットくらいの薄暗い裸電球に照らされているそれも、美術品としては造りがかなり粗雑だったが、何か妙に私の気持を捉えて放さないものがあつた。

私はその前に立ってしばらくの間マリア像を眺めていた。

大きなマリアだった。腰つきが妙にふくよかだ。太い腰を、何やらいわずにラテン語のびっしり刻まれている岩をかたどったブロンズ台の上に降ろしている。聖母には色が塗られていた。青銅の表にテンペラ絵具で施されているらしいパステル調の柔らかな彩色は所々が剝がれ緑青が吹いていた。色は剝げたその都度塗り重ねられていて、剝げたところは塗料の層が幾重にも露出している。それが美しかった。

「……興味がおあり？」

私の斜め後ろに、フェリーニの映画に出てくるような巨大なハムみたいな中年女がいつの間にか立っていた。

買う気力も財力もなかった。

「……重そうですね」

つまらない返事をした。「ブロンズ製ですが、見た目よりはそんなに重くはありませんわよ」女は声帯の肉をこじ開けるような声で言った。「何ポンドくらいですか」重さには興味はなかったが、いきがかり上、そう尋ねざるをえなかった。そのとき彼女の言った数字を正確には思いつけない。多分普通の人間の五、六倍くらいの重さだったと記憶する。

私は後ろの彼女を無視して再び像に目をやった。

聖母像はよく絵にある、あのちょうどキリストが処刑されてのち十字架から降ろされる時に涙を流しているかのように、顔を斜めうつぶせ加減に何かを嘆いてるみたいだった。顔を見ると今にも慈悲の涙が頬を伝わって落ちてきそうだった。二つの腕は私のほうに向かって大きく開いていた。腕はしきりに衆生を慈しみ、迎え入れ、抱き、優しく包み込もうとするかのように内側に向かって柔らかな女性的な曲線を描いている。誘われるように手にそっと触れてみた。冷たかった。見た目とは違って無骨な感触があるのに少し驚いた。

その時、私はそれに近づいて、像にいくつかの奇妙な造作が施されているのに気づいた。全体のプロポーションからすると、やや太目の両腕の肩と肘と手首の関節だけが、ちょうどからくり人形のそれのように節を持って繋がっているのである。動くようになっていいるらしい。そ

れからもう一つ奇妙なところがあった。体のある部分に無数の穴が見られた。豊満な胸から、まるで妊婦を思わせるようにふくらとした下腹部にかけて、直径五ミリほどの小さな穴が左右対称に何十カ所も穿たれている。

「この穴は、何か意味があるんですか？」

後ろに付んだまま様子を見守っている女に、私はそう尋ねた。

「貴方は大変良い所にお気づきになりましたね」

女は急に改まって教師のような口調になって言った。

「こちらに来てもらいなさい」

女は微笑みながら、私を像の裏側に導いた。

私たちは、埃を被って床にころがっている、マダガスカル島の呪術用の鰐のトーテムをまたいで、マリア像の裏側を覗き込んだ。像の背に、脂っぽい色の田園風景の描かれた一八世紀ナビ派の大きなキャンバスが倒れかかっていた。女はそれを粗大ゴミでも扱うかのように手荒く後ろに押し退けた。部屋の空気が揺れ、黴と埃の臭いが鼻をくすぐった。

彼女の甲高い声が密閉した部屋に響いた。

「こんなに珍しい聖母像はどこに行ったって、めったにお目にかかれないですわよ。なにせ人

を救うために造られたんじゃない、地獄に導くために造られたんですから」

女は聖母像を前に、聞き捨てならない不謹慎なことを言った。

「地獄？」

「そうですHELLです。HEAVENじゃありません。ここを見てごらんさい」

女はジルコンの指輪の食い込んだ、白いぶよぶよの右手の人差指で、錆びた鉄の棒の先に触れていた。先端を電灯の光がかすめた五センチ角ほどの無骨な鉄の棒が四〇センチほど薄暗がりのほうに延びて、それはマリア像の背中に突き刺さっているように見える。なお体を傾けて覗き見ると、像の背中に直径約一〇センチほどの穴が空いていて、その穴へと鉄の棒は滑り込んでいた。像の背中はただの壁みたいに偏平だった。彩色もなく、鑄造したままの青銅の地肌がケロイドのようにむき出しになっている。裏だけ見るとそれは工場のどこかにある何かの工作機器のような感じだ。

私はその棒の意味するものがなんだかわからず女の顔を窺った。女はいわくありげに微笑んだ。顔にせめぎあっている肉塊は動かなかったが、唇と目が細くなって横に広がった。太った割に、繊細な薄い唇だ。それが饒舌に動いた。

「これが、神の御意を伝えるスティックなの」

彼女は、身振りを交え、マリア像の背中から突き出ている鉄棒のいわくを説明しはじめた。